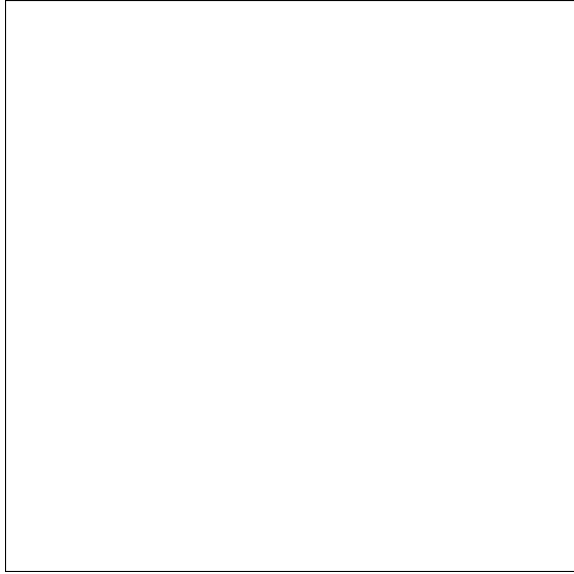




(utan bilder)

- Tessa Welch
- Wiehan de Jager
- Masato Tanaka
- Japanska
- nivå 3



ノシムリス本の鬚の毛

Detta verk är licensierat under en Creative Commons  
 Erkännande 3.0 Internasjonal Lisens.  
<https://creativecommons.org/licenses/by/3.0/deed.sv>

Denna saga kommer från African Storybook  
 ([africanstorybook.org](http://africanstorybook.org)) och vidarebefordras av  
 Sagor för barn på svenska (<https://berattelser.se/>),  
 som erbjuder sagor på många språk som talas i  
 Sverige.

Skriven av: Tessa Welch  
 Illustrerad av: Wiehan de Jager  
 Översatt av: Masato Tanaka

ノシムリス本の鬚の毛

[berattelser.se](http://berattelser.se)

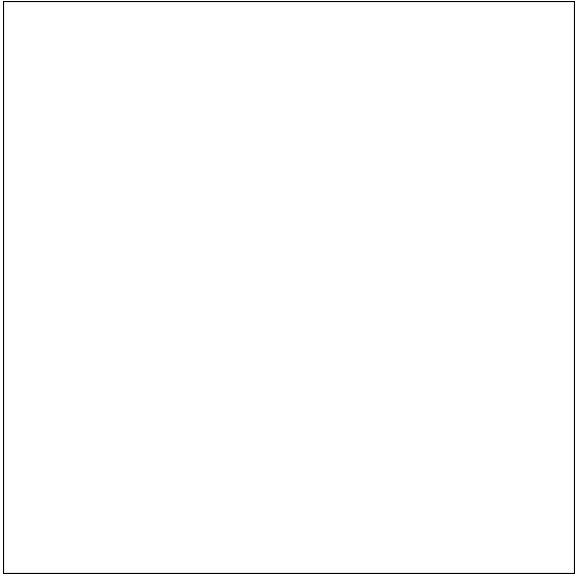
Sagor för barn på svenska



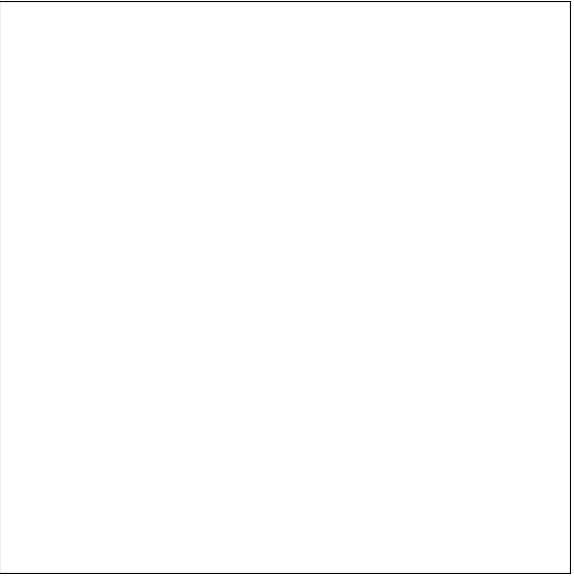


むかしむかし、三人の女の子が薪を集めに出  
かけました。

すると、犬はノジバシが自分をだましたことに気がつきました。犬は村に向かって走り続けました。村ではノジバシの兄弟が大きな棒を持って待っていました。犬はふり返って走りさっていき、それ以来現れることはありませんでした。



その日はとても暑く、三人は川へ泳ぎに行きました。三人は水遊びをしたり水の中を泳いだりしました。



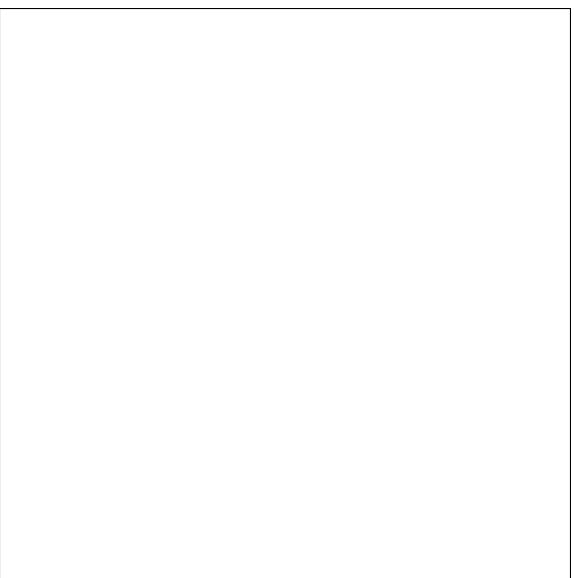


突然、三人はおそい時間になっていることに気がつき、急いで村に帰ろうとしました。

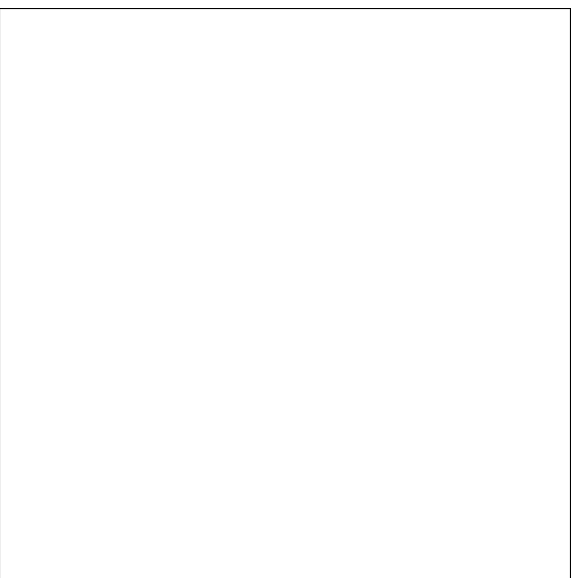


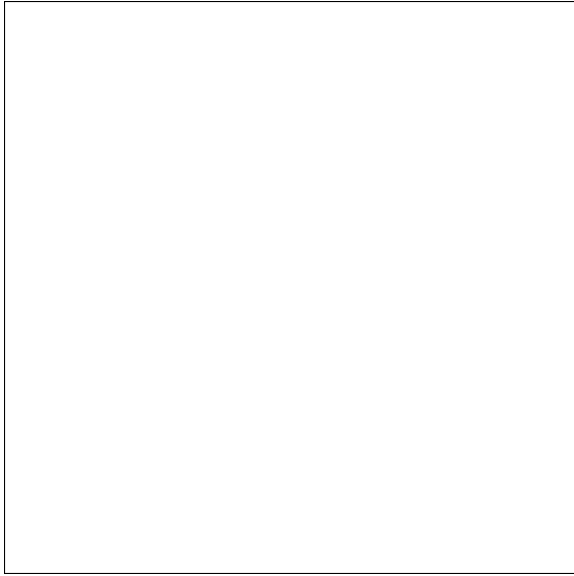
犬は家に戻るとノジベレを探しました。「ノジベレ、どこにいるんだい! 」と叫びました。すると、「ベッドの下にいるよ」と一本目のかみの毛が言いました。二本目が「扉の後ろにいるよ」と、三本目が「囲いの中にいるよ」と言いました。

犬が出て行ってすぐに、彼女は自分のかみの毛を三本抜きました。一本をベッドの下に、一本を扉の後ろに、もう一本を囲いの中に置くと、できるだけ速く村へ向かって走りました。



村の近くまで来たところで、ノジベルが首元に手を当てました。ノジベルはネットクスを忘れてきてしまったのです。「お願い、一緒に戻って!」と彼女は二人に頼みました。しかし二人はもう時間がおそすぎると言いました。



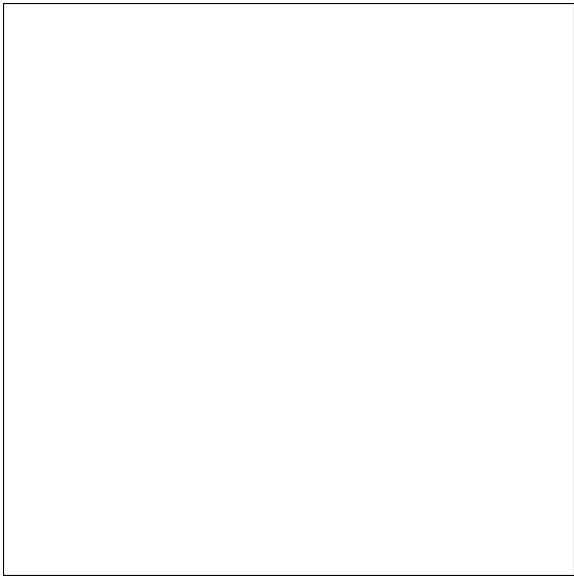


ノジベレは一人で川に戻ることにしました。  
ノジベレはネックレスを見つけると村に急ぎ  
ました。しかし、彼女は夜道で迷ってしまっ  
たのです。

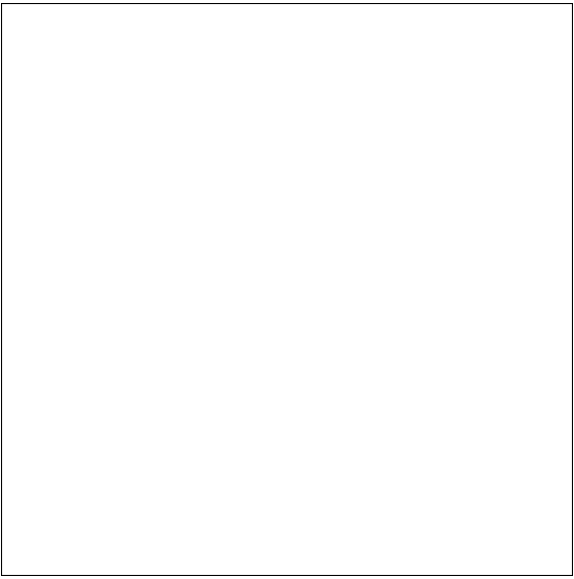


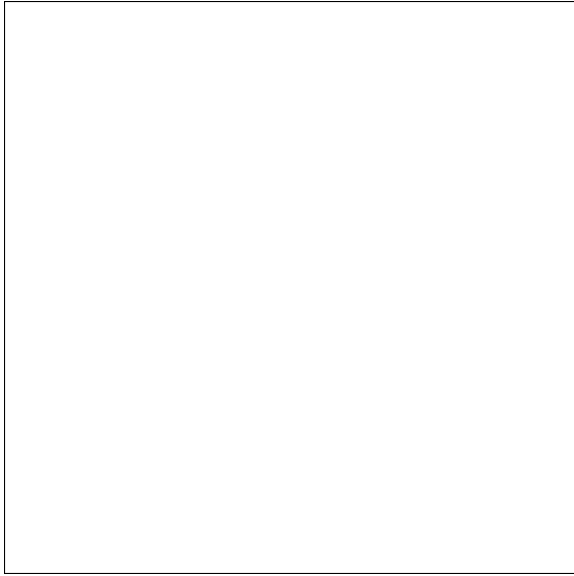
ノジベレは毎日犬のために料理やそうじ、せ  
んたくをしました。ある日犬がこう言いまし  
た。「今日は友達のところに行かなきゃ行け  
ないんだ。帰ってくる前にそうじやせんたく  
をして、何か作っておくんだよ。」

すると、「ベッドを用意しろ」と犬は言いま  
 した。ノジベルが「犬のベッドを用意したこ  
 となんかないわ」と答えると、「用意しない  
 とかみつくよ!」というので、彼女はベッド  
 を用意しました。



遠くに小屋の光が見えました。そこに急いで  
 向かい、扉をたたきました。





驚いたことに、犬が扉を開けて、「何がほしいんだい? 」と言いました。「迷ってしまったので寝る場所がほしいのです」と彼女が答えると、犬は「おいで、じゃないとかみつくよ」と言いました。



中に入ると、犬が「何か作ってくれ」といいましたが、ノジベレは「犬にごはんを作ったことなんかないわよ」と言いました。すると犬は「作らないとかみつくよ! 」ということで、ノジベレはごはんを作りました。